

## 翻 訳

## 中国における人の研究

## — 相手なき対談 —

費 孝 通 著  
蕭 紅 燕 訳

80歳という齢は、おそらく人間にとって一つの境目ではなかろうか。この年齢を越してしまうと、心情的にかなりリラックスできるような気がする。なぜなら、残された歳月に、それまでの人生で為されてきた功罪を訂正しようとしても、とうてい不可能である。したがって、いままでの足跡を一々、平常心でもってふり返ることができる。

このたび、中根千枝教授と喬健教授のご要望により、「中国における人の研究--個人の経歴について--」という題目で講演をする機会を与えていただき、謝意を表したい。わたしの80歳誕生日祝いのために開かれる「東アジアの社会研究」と題するシンポジウムである。

この演題の意味は、人類学という学問分野でわたしがどんなことをしてきたについて、ふり返らせてもらうことである。もちろん、わたしの仕事が、果たして中国の人類学界を代表できるかどうかは疑問である。しかしながら、自分のしたことは、中国人である以上、中国における人類学的研究であることは間違いない。少なくとも自分の仕事は、同時代中国の学問の方向性を示しているといえよう。

それでも、この題目にどこから答えればよいのだろうか。わたしはずいぶんと困ってしまった。

この問題をずっと思案していると、喬健教授から1冊の本が郵送されてきた。Sir Edmund Leachの著作 *Social Anthropology* (1982) である。Sir Edmund とは、LSEで学んでいたころの同級生である。彼との友情は幾たびも中断させられたものの、疎遠になることはなかった。1981年、わたしが英国訪問の際、ケンブリッジにある彼の書齋

で、一日じゅう語り合ったものである。だが、それが彼との最後の語り合いになるとは思いもよらなかった。

うちのゼミにおいて、同窓生のなかで彼は必ず抜けて雄弁な若者であった。率直で飾り気の無い、明快にして鋭いその話しぶりをなかなか忘れられない。このたび、彼の著書を拝読してみると、おそらくその遺作かもしれないが、彼のその愛すべき性格が晩年まで衰えることなく、貫かれたことをすぐに感じた。このような英才が長寿を全うできなかったことは、まことに残念でならない。

彼の著書を読み終わると、わたしは直感した。彼はその著書のなかで、わたしをはじめ、数名の中国人類学者の著作について論じている。そこでは二つの問題が提起されており、わたしはそこからヒントを得られた。

その二つの問題とは次のとおりである。

一つは中国人類学者のように、自らの社会を研究対象とすることは、果たしてよいのか？

もう一つは中国のような広大な国土を有する国家において、個別的な地域での事例研究では、中国の国情を果たして概括できるものなのか？

上記2点について、Sir Edmund はいずれも疑問を持っている。まず第1点についてだが、彼は人類学者は自らの生み育った社会を研究対象としてもかまわないことを認めている。しかも、一部の中国人類学者はすでにそうした実践をしている。

それにもかかわらず、彼は次のように断言している。「疑いもなく、このような実地研究について、未経験者に対しては、わたしはお薦めできない。」

つづいて、彼は1934年から1949年にかけて、英文で刊行された中国人類学者の著書を4冊取りあげて、一々手厳しい論評を加えている。それによると、そのなかの1冊、幸いにして拙著 *Peasant Life in China* (『中国農民の生活』、すなわち『江村経済』) だが、この本はある程度、*up to a point* として自らの社会を研究するのに役立つものであるといちおう認められてはいるものの、他の3冊はいずれも、この研究手法が取るに足らぬ証拠だと見なされた。失敗の原因については、彼は「おそらくかれらの物を見る目は一般民衆ではなく、個人的な経験による偏見のため歪曲されてしまったのではないか」と評している。

人類学者が自らの社会を研究することに対して、Sir Edmund が自認するところの

「ばくの消極的な態度」は、彼の恩師 B. Malinowski の観点とは正反対である。恩師 B. Malinowski は、拙著“Peasant Life in China (1939)”の序文のなかで、次のように語っておられる。

「もし人間にとっては、自己認識がもっとも困難なことであるとすれば、疑いもなく自国の人々を研究対象とする人類学は、実地調査のなかでもっとも難しい仕事であると同時に、もっとも価値に富む成果でもあろう。」

ここでは、二人とも「疑いもなく」という断固とした態度をとってはいるものの、まったく正反対の結論を導き出している。前者は中国人による中国社会の研究をすることは取るに足らぬものであり、成功しがたいものと断言している。それに対して、後者の場合はこのような方法を極力薦め、人類学という学問分野における「新たな発展を示す」ものとまで予測しているのである。

Edmund の態度と論調は別に珍しいものではない。他人の意見に付和雷同せず、わけでも恩師や友人の見方を鵜呑みにせず、いいかげんに同調しないというその学風については、彼をよく知っている人なら、誰しも賞賛するところであろう。今日、わたしはここでこの異なる見解を対比させ、かつ議論に身を乗り出してみると、懐かしき LSE 時代、2階にある Malinowski の Seminar Room (ゼミ室) に思わずタイムスリットした気がした。

議論が白熱化するの意見の不一致から来ているが、議論の結果、必ずしも意見の一致に達するとは限らない。しかし、少なくとも双方にとって、異なる見解の出所をはっきりさせることができるし、そこで互いに認め合う地点に達する。本日、Edmund がもはやこの議論に参加できなくなったことがまことに残念なことだ。

もし彼がいれば、きっと会心の微笑みを浮かべるであろう。彼はわたしの考えに賛成してくれるかもしれないし、少なくとも理解してくれると思う。つまり、われわれの見解の相違は、とどのつまり、Malinowski をはじめ、われわれがみんな英国人ではないからである。われわれの各自の文化伝統が「偏見」をもたらし、あるいはより正確に言えば、「先入観」というべきものをもたらしているのだ。こうした「先入観」には、それぞれの文化的根源があり、それがまさに Edmund がいうところの民衆の経験から生じるものであろう。

しかし、この点についても、わたしはやはり Edmund の意見とは一致しない。なぜ

なら、彼は中国の人類学者が自らの社会研究を十分に成し遂げられていないのは、個人の経験による偏見からだと考えている。彼がいう民衆の経験とは、民族の歴史伝統と現在の境遇であるとわたしは理解している。

Edmund がなぜエンジニアをやめて、人類学という分野に入り込んだのかについては、わたしは知らない。しかし、わたし自身がなぜ人類学を志したかについては、よくわかっている。この動機づけこそおそらく、同じ学術領域において、おのおの自分の道をたどった原因ではなからうか。

わたしの場合は、そもそも医学を志していたが、のちに医者になるのをやめた。その理由は、「個人のための病氣治療」より、「万民への幸福をもたらす」ことのほうがより有意義であると、自覚したからである。自分の選択はそれなりの価値判断によることがわかる。

個人の価値判断はその所属する文化、およびその生きている時代無しではとても考えられない。20世紀初頭に生まれた中国人のわたしは、ちょうど社会の激変、国家存亡の時期に遭遇した。そういうわけで、わたしのこのような価値判断から医学をやめて人類学を学ぶようになったことは、友人たちにも理解されよう。

わたしが人類学を志したきっかけは、早い話が、中国社会を認識する観点や方法を身につけ、さらに学んだ知識でもって中国社会の進歩を促そうと考えたことにある。したがって、はっきりとした目的がある。もし果たしてEdmund のいうように、中国人による中国社会の研究が取るに足らぬもののであれば、つまり、人類学を学んでも中国の理解に役立たないならば、わたしは人類学という学問に身を投じたりはしなかつたろう。あるいは、一旦乗りかけた船から、早くも下りて「のりかえ」でいたと思う。

わたしは人類学を選択した動機について隠したりはしない。わたしがなぜ人類学という分野に入りこんだかについては、Malinowski がもはや上述の序文の中でわたしに代わって説明してくれた。Malinowski はわたしに同調し、次のように語っておられる。

「人類学は少なくともわたしにとって、過度に標準化してしまったわれわれの文化に対するある種のロマンチックな逃避なのである。」

これは単なる自嘲ではなく、実に意味深長なことばである。Malinowski は当代の西方人類学者のどうしようもない心情を、沈痛な気持ちで鞭撻しているのだ。

Edmund をも、こうした西方人類学者と一緒にたにしようなど、わたしは思ってい

ない。しかし、彼はその学術自叙伝ともいべき本のなかで、人類学は科学であることを根本的に否定している。このことは非常に考えさせられた。彼は次のように語っている。

「社会人類学は自然科学という意味での科学ではなく、科学であることを目的とすべきでもない。それは何かというと、実際では一種の芸術に過ぎない。」

このことばの意味は、人によって理解が違って来るであろう。だが、わたしには、上述の Malinowski のことばを関連させて考えた。つまり、Edmund をこんなふうには理解できよう。西方人類学という分野では、少なくとも一部の学者たちは人類学を自分の才能を演出させるための舞台とみなしている。もっとわかり易くいえば、かれらにとっての人類学は一種の知的訓練、または遊戯、ひいてはある種の暇つぶしである。

これらの動機に対して、わたし個人としては特に反発をしない。豊かで競争の激しい社会において、個人の生計や社会的地位がすでに保証されていれば、人類学の研究で暇つぶしをし、または才能を発揮しようとするのは、まさに悠々自適な生き方といえよう。しかし、残念ながら、わたしにとっては、そのような態度で人類学に取り組むことができないことは、自分自身が非常によくわかっている。事実、この道を歩むことは有り得ない。かりにそうなったとしても、わたしは楽しめないであろう。

一方、Edmund の思考の鋭敏さが、わたしのような中国人類学者を困らせるもう一つの問題提起を突きつけてくる。つまりさきほど述べた第2点である。個別の地域で行なった事例研究で、果たして中国の全貌を認識することができるのだろうか。

この疑問の鋒先が、まっすぐにわたしの要衝を突いて来る。わたしが人類学を志したのは中国を理解することであり、そして中国を改造することが最終目的である。われわれが個別の小さな地域に深く入り込んで、事例研究によって調査をおこなうという方法では、果たしてこの目的に達することができるだろうか。個別から果たして概括的な理解に繋がるものであろうか。

この問題に対しても、Edmund は否定的で消極的な態度をとっている。第1点については、彼はわたしのことを厳しく論評しておらず、幾つかお褒めのことばをもらったことに感謝しなければならない。しかし、第2点においては、彼はわたしを捉まえようとして、庇うような口調で、わたしのようなやり方では、「中国の理解」に繋がることを信じてはいないことを示した。

「費孝通は自分の著書を『中国農民の生活』と名づけてはいるものの、彼が描いた社会体系が、中国という国のすべての典型とまでは言っていない。」

さらに、次のように語っている。

「この種の研究はいかなる個別的な事柄の典型とはいええないし、またそう称すべきものでもあるまい。そうすることはそれ自体が面白いから。」

このように、Edmund に庇われて、わたしは恩にきるべきであるが、しかし、彼の意見は半分しか受け入れることができない。確かに、わたしはかつて調べた江村という村落を、中国におけるすべての農村の典型であるなどとは考えたこともないし、この農村を研究することで中国の国情を全面的に理解できるとも言っていない。

ちなみに、本の英文名はあくまで出版社が付け加えたものだ。原本がわたしの博士論文であり、その題名は Kaihsienkung: Economic Life of a Chinese Village (『開弦弓：一個中国農村の經濟生活』である。しかも、英語版の扉には「江村經濟」と書いてある。同書の中国語訳の題名も「中国農民の生活」を用いず、「江村經濟」のままである。この経緯について、Edmund は知っているはずである。

確かに、一つの農村を解剖すること自体は有意義なことで、そういう意味では確かに面白いと思う。しかし、正直いって、自分の問題関心はこの村の理解には止まらない。中国におけるすべての農民の生活、ひいてはすべての中国民衆の生活を理解しようという野心は、わたしには確かにある。だから、江村という小さな村で行なわれた調査は、わたしの旅の起点に過ぎない。

こうしてみると、Edmund の見方が間違っていないとするならば、つまり、個別によって全体を概括することができないというなら、自分が袋小路に入ってしまうことになる。そこで、わたしは Edmund の問題提起に直面せざるを得ず、そして、彼の考え方が必ずしも正確ではなく、「個別から出発して全体に近づくことが可能だ」ということを、実践を通して証明しなければならなくなる。

この問題について、わたしは『江村經濟』を書き終えたころすでに気づいていたし、また当時の国内における少なからぬ論評もこの問題に集中していた。これに対して、わたしは自分なりの回答を用意していた。一つの村を全国農村の典型とし、その村でもってすべての中国農村を代表しようとするのは間違えである。しかし他方では、ある村のすべてを他地域と異なる存在としてとらえようとするのも、正確ではないと考えて

いる。

若い時分に動物学や解剖学を学んだ影響のせい、わたしは客観的な事物に対して、それを類型化するというくせがある。すべての事柄はいずれも一定条件のもとで存在するため、もし条件が同じであれば、似通った事柄が発生するのだ。ここでいう同じ条件のもとで発生した同じ事柄とは、一つの類型になる。とはいえ、同じ種類のなかの個別的事柄は完全に一致しているわけではなく、「類型」は「個別」の重複ではない。なぜなら、それぞれの条件が完全に一致するとは限らないからだ。ここでいう「類型」とは、主要な条件が同じで発生したおおよそ同様な各自の「個別」を指しているのみである。

江村を例に挙げてみよう。この村は一定の条件を具備した中国の農村である。中国各地の農村は地理的にも、人文的にも各方面の条件が違うので、江村が中国農村の典型にはなりえない。言い換えれば、江村で見た社会体系などを、中国の他の農村にあえて当てはめてはいけぬ。しかし、この村は牧畜地帯ではなく農村であり、外国の農村ではなく、中国の農村である。

このように村の特徴について話していると、ある程度の類型ができあがってくる。ここで Edmund との議論の焦点となるのは、江村が中国のすべての農村を代表できるかどうかではなく、江村がある方面において、中国の幾つかの農村を物語ることができかどうかにおいてである。つまり、江村を形成させた条件が、その他の幾つかの農村を成り立たせているかどうか。そして、こうした村落を類型化することは可能かどうかになってくる。

もし中国には江村のような村落類型の存在を認めるならば、つづいて聞きたくなるのは、他にどんな類型があるのか？ われわれが比較の方法によって、中国農村の各類型を一つ一つ描き出せるものなら、すべての村落を一つ観察し、すべての中国農村の理解に近づけようとするは無用となろう。

ここで注意していただきたい。わたしはこれまで「次第に」とか「近づく」とかいう表現をたびたび用いている。要するに、類型比較という手法によって、個別から次第に全体に接近することは可能である。Edmund は数学の概念で物事を語ることを好むようだが、わたしがここで使った「接近」という用語は、まさに微積分の基本概念なのである。

自分の経験を話したほうが、よりわかり易いかもしれない。1938年、わたしは英国か

ら帰国した。Peasant Life in China の校正を済ませ、抗日戦争のころ、大後方となっていた雲南省昆明にたどり着いた。わずか2週間の骨休めをしたあと、わたしは昆明附近にある禄豊県のある村へ調査に出かけた。この村を禄村と名づけた。

禄村と江村とはまったく条件が異なっている。江村は沿海地方の伝統的経済の比較的発達した地域にあり、家庭内手工業の伝統を有しているうえ、上海から伝来されてきた近代商工業に深い影響を受けた農村である。それに対して、禄村は近代的商工業の中心から遠く離れた内地農村であり、この村の農民のほとんど全員が、田畑からの収入で生計をたてていた。江村と禄村の備えている条件の相違が、わたしに類型を比較研究する機会を与えてくれた。

雲南省の内地農村には、ほかにも異なる特徴がある。われわれは滇池に沿って歩き回ったが、三つの違う類型をみつけた。禄村のほか、易村と玉村がある。この三類型の比較研究について、1941年、われわれは英語でいちおうまとめておいた。Three Types of Village in Interior China (『中国内地農村の三個類型』)という題名で、当時の「太平洋学会」から刊行された。そこで、われわれはすでに Types という用語を論文名に用いた。

この雲南三カ村の詳細については、1943年、わたしは米国で Earthbound China (中国語版『雲南三村』は目下のところ、印刷中である)を書きあげた。この本は人類学の手法においては『江村経済』に繋がるものであり、類型比較の実験的なものであると思われるが、欧米では後者のように脚光を浴びることはなかった。どうもこのような研究方法は、西方人類学者が関心を持つものではないらしく、Edmund の目にも留まらなかったであろう。あるいはそのころから、わたしがすでに、学術領域における学科の境界線に束縛されない野生馬のように、西方人類学者たちの目に映っていたのかもしれない。

ところが、この野生馬はその Earthbound China を書き終えてから、30年にわたって人類学界に姿を現すことはなかった。したがって、先ほど述べた、「次第に接近する」という約束も、なかなか実現のしようもなかった。

しかし、70歳を過ぎて、往年駆けめぐるっていた分野ようやく立ち戻れたわたしは、「次第に接近する」という方針をそのまま貫いた。江村での追跡調査をおこない、半世紀にわたるこの村の社会変化を理解するだけでなく、自らの研究対象を村落レベルから



一つランクを上げ、小城鎮の範囲にまで広げたのである。

もちろん、老馬にはそれなりの切り札がある。わたしは類型比較法を村落から小城鎮へと応用した。まず手始めに郷里の幾つかの小城鎮で実施し、次第に長江デルタに位置する四つの経済的に先進的な市へ入り、2年後にはさらに江蘇省全体へと押し進めた。

また、4年目からわたしは省という境界線を乗り越えて、二方向に分けて研究を進めるようにした。一つは沿海地方の江蘇省から浙江省へ、さらに福建省を経て広東省の珠江デルタへ至り、そこから広西省西部まで進める。もう一つは辺境地帯へいく道で、黒龍江省から内蒙古自治区、寧夏回族自治区、甘肅省および青海省に至る。さらに、中国中部に位置する河南省、湖南省、陝西省も訪れたし、ここ8年間、沿海地方、中部および西部まで、おおよそ足を運んでいる。

すでに高齢者のわたしにとって、このような広大な「フィールド」を相手にしては、江村で行なわれたような事例調査をするには、単独ではとうてい無理である。だが、幸いにして、この時期のわたしはもはや以前のように一人ぼっちではない。わたしには小さなチームワークができています。若い学者たちが学びながら仕事をし、それぞれの調査地で直接的な観察を行なっている。

われわれは地方政府関係部門の方々と協力し合いつつ調査を行い、さらにアンケート調査の実施により、点から面へと幅広い数量的な調査も可能となってきた。また、コンピューターのおかげで、膨大な統計資料をいち早く整理することもできるようになった。江蘇省内におけるすべての小城鎮に対するサンプル調査をやったが、これはまさに新しい試みである。中国全体への理解により近づくことができるであろう。

ところが、自分にとって、調査研究のできる残された時間はますます短くなってしまったので、わたしはなるべく多くの場所へ足を運ばざるを得なくなった。それで、行く先々で自分の感じたことを書き留めておくことが習慣になったが、詳細な調査研究は後の人々を待つ。こうしたメモは道を開く、皮切りみたいな仕事だと思う。こうした文章をたくさん書き残してきたが、以前書いた一部の文章は、シカゴ大学出版社で昨年(1989)、*Rural Development in China* という書名で刊行された。中国語論文を読めない方は、この本から幾つかの事例を見つけることができよう。

さて、わたしは自分の体験でもって、この演題に求められている、われわれ中国人類学者に対する Edmund の問題提起に答えたいと思う。まずわたしのことを心配してく

ださる友人たちにお伝えしたいことは、晩年のわたしはここ10年間貴重な機会を得て、自分の初志を貫くことができた。まことにありがたく思う。もちろん、わたしは中国の国情をどれだけ理解できるかということはよく言えないが、50年前に比べて、その理解がより深まったことはいえよう。

また、1940年代に行なった調査資料から得た認識、さらにそれを踏まえて形成された農村発展に対する自分の見解の数々が、実情に見合ったものであることが、1980年代以後、実践を通して多く立証されたのは、わたしにとってまことに嬉しい。したがって、人類学の方法を真剣に用いて中国を認識することは、中国の発展に役立つものだということ、わたしはいつそう強く信じるようになった。人類学が実用的な科学になり得るのである。

哲学の造詣が深く、また優れた学術的環境に恵まれた Edmund をとても羨ましく思う。彼の疑問に対するわたしのような実用主義者の答えでは、彼は簡単には納得できないであろう。しかしながら、よく考えてみると、Edmund からみると、あまりにも単純で凡俗すぎるというわたしのような性格は、偶然に生じたものではあるまい。これはわたし個人の特徴でもなければ、個人の経験にもとづく偏見でもない。このような性格形成には、中国における知識人の伝統文化という烙印のあることが介在せずには考えられない。

これについて、すぐに思い浮かべる座右の銘だけでも次のことばがある。一つは「天下興亡、匹夫有責」であり、もう一つは「学以致用」である。いずれもわたし自身の学問を支える根本ともいえることばである。

遙か2000余年前の孔子の思想が、わたしの世代に至るまでこれだけ深い影響を及ぼしているとは、思いもつかないことである。その孔子でさえ、掴み所のない深遠な道理に頭を使うのは、お勧めではないと語っているではないか。孔子が列国を遊説して歩いた目的は、社会に役立つ機会をみつけるためではなかったのか？

実用主義の精神の感化を受け、学術分野に溶け込んだ結果、わたしのような者にとっては、これが古からの伝統とは少しも自覚をせずに、それを現代の学科に用いて、中国の理解および中国の進歩を促進することを目的とする、中国式の応用人類学を形成させたのである。ある意味では、このような学派が成り立ったのは、いかなる個人の創造でもなく、歴史的伝統と当面の情勢と結びついてできあがったものと言ってもよからう。

要するに、わたしと Edmund との意見の違いは、人類学の素養を備えた者なら、理解してもらえることである。これは、誰が正しく誰が間違っているかという問題ではなく、異なる伝統と環境から生じた問題なのだ。われわれは互いに認め合うだけでなく、互いの仕事も褒めあう。われわれはそれぞれの文化伝統を大事にするばかりでなく、他人の文化伝統をも認め合おうではないか。これが人類学者にとって持つべき共通した認識であろう。

しかしながら、残念なことに、人類学の考え方は当面の世界では、まだ一部の人々のものに過ぎず、一般人の常識には至っていない。だが一方では、科学技術の急速な発展によって、さまざまな文化の中で生み育ち、異なる人生観や価値観を持った人々が、互いに持ちつ持たれつの間柄にある、小さく狭い世界で共生せざるを得なくなったのである。これらの人々は物の考え方から行動様式に至るまで、多種多様な生活スタイルをもって共同生活に入っているのだ。そこで、どうすれば平和共存できるかが、もはや重要視しなければならぬ重大な課題となっている。

文化の隔たりのため引き起こしたいさかいが、人々の共生を脅かしかねないのである。こうしてみると、このたび、わたしと Edmund という相手無き対談は、異なる国籍を持ったわれわれ人類学者という、少数の人々の共通した関心と呼び寄せただけに止まらないであろう。今後、人類がどうやって21世紀に入るかという問題にまで繋がるのが、この「対談」の意義となろう。

すでに80歳を過ぎたわたしの人類への関心が、どうも杞憂ではなさそうだ。人類学者たちは異文化の容認という分野で責任を持って、いくらか貢献すべきものではなからうか。

友人のみなさま、本日のご静聴、まことにありがとうございます。人類学の絶え間なき前進のため、共に努力いたしましょう。

1990年7月25日

#### 謝 辞：

翻訳文の添削は、友人大上葉子さんを煩わしたことをここに記して、謝意を表したい。ただ、文中に間違いがあるのであれば、訳者のわたしがその文責を負うことになります(訳者より)。